

言いたい ほうがい

もあって、中高校生の短歌講座・短歌を絵にしよ、などの企画は十分な成果は見られなかったが、次第にその意義を理解していただけるようになり、二中で一年生対象に短歌講座を開き、生徒一人一人が作品を作り添削指導を受けるなど作歌の体験をし、桐陽高では沼津に

この行事が次の世代を担う子ども達が、自然や「人間」を自分の眼で、心で観察し、感じ、考える態度を育み、物質文明に埋没しない人間による新しい沼津のまちづくりを意図したものであるだけに、子ども達の生き生きとした参加意識に感動した。

小島ゆかり・須永秀生各氏によるシンポジウムは、ただ酒と旅の好きな牧水という牧水観から踏み込んだ新しい牧水観をも示し、現代に生きる私達の生き方・考え方を提示した。

沼津文学祭は予期以上の数々の発見や展開をもたらし、イベントの種類や数ではなく、質的な深まりである。著名作家の顕彰でなく、市民、とりわけ次代を創造する若い人達が切り拓く新しい「沼津の旅立ち」である。そして継続していくことの意味が痛感された。

沼津文学祭を終えて

四方一渺

八月一日の小中学生を対象とした市内歴史探訪と狩野川の渡し船体験に始まった第一回沼津文学祭も、明治史料館で協賛特別企画展「沼津兵学校の文人たち」が現在開催中だが、今月六日の玉城徹先生の講演をもって今年の行事は、ひとまず幕を閉じることができた。

作る試みに取り組んでい

ト講座も予想以上の参加者を迎え、安堵の胸を撫

仕、池内氏の観察者としての新しい牧水発見の意味付け、さらには短歌を絵にしようの入選作、金岡中二年三宅遙太君の「白鳥」の歌への斬新な洞察に感嘆している。

初めての企画であり、あまり当世向きでない文学関係の行事でもあるので、幕を開けるまで、否、開幕後も関係者一同、不安の連続であった。

予期以上の素晴らしい感覚で、これが子ども作品かと驚く成果をもたらしたが、それは小中学生の短歌作品とともに市民文化センターに展示され、来館者の目をみはらせた。

十月十八日の池内紀氏の基調講演、伊藤一彦・

は短歌・俳句展を催した。時あたかも大岡氏の文化勲章受章が伝えられ、交流会には遠く秋田、宮崎からも駆けつけてくださった。

当初は行事や趣旨の浸透が徹底しなかったこと

文化センターに展示され、来館者の目をみはらせた。

の基調講演、伊藤一彦・

大岡信氏の特別文化講演会を開催し、沼津牧水会

（沼津文学祭実行委員長、松下町）